二次元ぷち文庫

蒼井村正

表紙イラスト：或十せねか

カースイーター 呪詛喰らい師外伝

淫女神の森

前編

試し読み版

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

※本作はあとみっく文庫『呪詛喰らい師 1 ～ 3』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

カースイーター

呪詛喰らい師外伝

淫女神の森 前編

蒼井村正

表紙イラスト／或十せねか

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

常磐城咲妃（ときわぎさき）

「呪詛喰らい師」という異名を持つ少女。幼いころから退魔師としての修業を積んでおり、淫神を自身の身体に封じる使命を帯びている。封じた淫神の力は使うことが可能。

雪村有佳（ゆきむらゆか）

咲妃のクラスメイト。淫神に取り憑かれたところを咲妃に救われて以来、レズ友達として愛しあっている。

瑠那（るな）・イリュージア

霊を操る術を得意とする魔術結社「レメゲトン派」の生き残りの少女。かつて咲妃を襲撃したが返り討ちに遭い、仲間になった。

「きゃうんっ！　やっ、くすぐったいです……やぁぁんっ！」
「有佳、そんなに身悶えしたら、上手く洗えないじゃないか」
「そっ、それは洗うっていうよりくすぐってますっ！　ひゃうぅぅぅ～んッ！」
「キャハハッ、有佳って敏感なのね、アタシも洗ってあげる♪」
シャワーソープの芳香が漂うバスルーム内に、少女たちのふざけ合う声が響いている。
ここは、呪詛喰らい師の異名を持つ少女退魔士、常磐城咲妃が住居として借りている高級マンションの一室。
大きなバスタブの中、泡まみれになった裸身を擦り合わせるようにして咲妃と睦み合っているのは、彼女の親友であり、同性の恋人でもある少女、雪村有佳と、咲妃を保護者として恋い慕う金髪碧眼の小悪魔少女、瑠那・イリュージアだ。
「やはんっ！　あっ、あんッ！　咲妃さん、そんなにされたら、わたし……もう……ンンッ……くふうぅぅ……ンッ」
くすぐったげに身を捩って嬌声を響かせていた有佳の喘ぎが色っぽく変化してきた。
愛玩動物的な可愛らしい顔立ちに、ゾクリとするような女の色香が浮かび、つぶらな瞳が熱く潤む。
「フフッ、可愛いぞ、有佳。この続きはベッドでしよう……」
背後から抱き抱えて愛撫していた少女の身体を解放した咲妃は、湯船からスルリと這い

出し、全身にまとわりついていた泡をシャワーで洗い流した。
「んぁ……ハァハァハァ……。咲妃さん……いつ見ても綺麗な身体ですね」
荒くなった呼吸を鎮めつつ、有佳はウットリとした表情で、咲妃の裸身を見つめる。
人の欲望によって存在を歪められた神、「淫神（みだらがみ）」を鎮め封じる、神伽（かみとぎ）の巫女として磨き上げられた咲妃の肉体は、美の神が全身全霊で造り上げたかのような、パーフェクトな造形物であった。
心地良さげに目を細めてシャワーの湯滴を浴びる美貌は、凛々しさと色香を絶妙なバランスで併せ持ち、腕から肩、腰のくびれに掛けてのボディラインは、程良く鍛えられた筋肉の輪郭が浮き出ていて、一流アスリートのように引き締まっている。
からだつきは全体的には細身なのに、たわわなバストは、重力に挑むかのようにドーム型の突出を際立たせ、尻たぶもそれに負けないムッチリとした肉感を見せつけて緩みなく張り詰めて、たくましい太腿へと優美な曲線を描いて続いている。
スラリと伸びた両脚は、太腿とふくらはぎにしっかりと筋肉がつき、足首が細く引き締まっていて、健康美の極致のような美脚だ。
「咲妃お姉ちゃん、頭洗ってェ♪」
湯船から出た瑠那が、メリハリの少ないロリータボディを擦り寄せて甘える。
「よし、洗ってやるぞ。瑠那の金髪は、サラサラで綺麗だな」

お風呂椅子に瑠那を腰掛けさせた咲妃は、背後で膝立ちになり、シャンプーの泡を盛り上げた金髪頭を優しく揉み洗いしてやる。
「うフ……嬉しい」
かつては咲妃と敵対したこともある死霊使いの金髪少女は、今は保護者となった呪詛喰らい師（カースイーター）の爆乳にもたれかかるようにして身を委ね、至福の表情を浮かべていた。
「有佳もおいで、洗ってやろう」
「行きたいんですけど、身体に力が入らなくて……ンッ……よいしょ、っと……あふぅ……ッ」
咲妃の美尻に見とれていた少女は、恥ずかしげな笑みを浮かべつつ湯船から這い出し、四つん這いの姿勢でにじり寄ってゆく。
「咲妃さん、今行きますから、わたしも洗ってくださいね。ンッ……きゅふん……ッ」
擦れ合う太腿の狭間で、疼き火照った秘裂が甘い愉悦を発生させ、湯よりも熱い体液がトロリと溢れ出て、有佳に甘い呻きを漏らさせた。

「ふう、いい湯だった。有佳、瑠那……、今日はお前たちの好きにしていいぞ」
風呂上がりで上気した裸身をベッドに横たえた咲妃は、イタズラっぽい笑みを浮かべて、

同性の恋人たちを誘惑する。
「そっ、そう言われると、逆に何をしていいか判らなくて、戸惑っちゃいますよ」
「ホントにいいのねお姉ちゃん？　好きにしていいなら、すっごくエッチなことしちゃうよ♪」
白いバスタオルを身体に巻いた恰好で、頬を染めてモジモジしている有佳とは対照的に、瑠那は小悪魔ロリータの本性を剥き出しにして極上裸身にのしかかってゆく。
「んふ、お姉ちゃんのオッパイ独り占め～♪　ちゅぱちゅぱちゅぱ……美味しい……」
仰向けになってもほとんど型崩れしない爆乳を揉み寄せた金髪少女は、左右の乳首をひとまとめに口に含み、吸う。
「ふぁ！　瑠那は本当にオッパイが好きだなぁ……はンッ！」
慈愛に満ちた笑みを浮かべて、ロリータ少女の髪を撫でていた咲妃の顔が、喜悦の表情を浮かべて仰け反る。
勃起を際立たせた乳頭を甘噛みし、舐め転がす瑠那の愛撫は、驚くほど巧みであった。
「瑠那さん、ずるいです！　じゃ、じゃあ、わたしも！」
意を決した有佳もベッドに飛び乗ると、すでに濡れ疼いていた秘部を咲妃の股間に押し当て、美脚を抱き締めて小刻みに腰を揺すり始めた。
くちゅ、ぬちゅ……ちゅぷ、ちゅぷ、ちゅぷ……。

有佳の内側から湧き出た蜜液でしっとりと潤んだ薄紅色の秘裂が、ツルリと無毛の咲妃の秘部に密着し、柔肉のワレメを互いに押し開きながら縦横無尽によじれ、揉み合う。

「ふぁ！　ちょ、ちょっと待て！　急に、そんなに激しくされたら、あぁぁうぅッ！」

攻撃的な貝合わせの奇襲攻撃を受けた咲妃は、色っぽく裏返った声を寝室に響かせて身を捩る。

「すっ、好きにしていいって言ったのは……んっ、さっ、咲妃さんですからね、にっ、逃がしませんよ！」

すっかりエンジンのかかった有佳は、呪詛喰らい師（カースイーター）の肉感的な太腿をしっかりと抱き締め、性器の密着をさらに強めながら、小振りなヒップを旋回させた。

じゅぷっ、じゅぷっ、ちゅぱっ、ちゅぱっ、ちゅぽ、ちゅぽ、ぴちゅるっ……。

粘着質の淫音を立てながら、マシュマロのように柔らかな大陰唇が互いをひしゃげさせて揉みこね合い、蜜に濡れた小陰唇が愛液を沸騰させそうな淫熱を発生させながら擦れ、捩れ絡む。

「どっ、どうですか？　気持ちいいでしょ？　わたし……わたしも、気持ちいいですッ！　咲妃さんッ、好きぃ……大好きですッ！」

普段は控えめで礼儀正しい少女は、女同士の性交でしか味わえない魔性の快感に理性を飛ばされ、色っぽく紅潮した裸身を躍動させて尻を振りたくった。

くちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……グリッ、グリグリグリッ！
「ひうっ！　あっあっアッ！　んんんうぅぅう～ッ！」
「きゅぁ！　んっんっんっんきゅうぅぅんっ！」
二つの恥骨にサンドイッチされたクリトリスがビリビリ痺れるような強烈な悦波を発生させ、咲妃と有佳は甘い喘ぎの二重奏を奏でて淫らな腰振りを競い合う。
「ゆっ、有佳ッ！　そんなに激しくされたら、もう……もう……ッ！」
有佳の動きに合わせて腰を使い反撃していた咲妃の秘裂が、絶頂寸前の痙攣に包まれた。
愛液の分泌量が急増し、勃起を際立たせたクリトリスが甘美な脈動に包まれて、さらに大きく、硬く尖り勃ってゆく。
「さっ、咲妃さんッ！　オチンチン……出しちゃっても……ンッ、いっ、いいですよ、久しぶりに……しゃ、射精、してもいいんですよッ！　咲妃さんッ！」
勃起クリトリス同士が弾き合う強烈な快感に裸身を跳ねさせながら、元々は自分の肉体に憑依していたフタナリペニスの具現化を促す有佳。
「だっ、ダメ……だ！　淫ノ根（インネ）は……あひッ！　かっ、感じすぎるから……出せないッ！　アッ、あぁぁんッ！」
過剰な刺激に反応してペニス化しようとするクリトリスの膨張を必死に抑え込みながら、咲妃は悩ましげな喘ぎ混じりに叫ぶ。

有佳を依り代にして、彼女を禁断の快感で煩悶させていたペニス型の淫神、淫ノ根は、具現化と同時に、理性を蝕むほどの強烈な射精衝動を引き起こすため、神伽の巫女である咲妃をもってしても、完全に制御することが困難なのだ。

「じゃ、じゃあ、女の子のままで、イッて……イってください。わたしも……もっ、もう……イキますからぁ！　ふわあぁぁぁ……イクッ、イッちゃいますぅ！　きゅふうぅぅぅ〜ンンッ!!」

ラストスパートの尻振りで一気に舞い上がった有佳の身体が咲妃の美脚を抱き締めたまま硬直し、断続的な絶頂痙攣を起こす。

「あぁぁ、有佳のが吸いついて……わたしも……イクっ！　はあぁぁんっ！　イク……うぅぅッ！」

熱い淫蜜をドップリと迸らせながら、咲妃も女悦の極みに舞い上がった。

互いの性器が熱い淫蜜を噴き出して絶頂収縮するのを感じながら、直角に交わった裸身が交互に跳ねる。

「ハァハァハァ……あはぁ……ん……ッ」

汗ばみ紅潮した顔に満足げな表情を浮かべた有佳は、胸元に抱き抱えていた美脚を解放すると、咲妃の隣にパタリと倒れ込んで口づけを仕掛けてきた。

「あふ……んっ、んふ……くちゅ、くちゅ、くちゅ……」

ひと擦りするごとに長く、太く充血したフタナリペニスは、桜色の陽光を艶めかしく照り返して、美少女の股間にそそり勃つ。
「はぅ……く……はぁうぅ……いっ、淫ノ根、ご笑覧くださりませ」
恥ずかしげに頬を染めて顔を伏せながらも、腰をせり出させて、股間に屹立する肉柱を淫女神に見せつける。
「ほぉほぉ、これは見事な摩羅（まら）が這え出たものよのう。色艶、形は良し、妾の元に迷い来たりし男どものモノとは、比べものにならぬ濃い精気を放っておるわ」
樹霊の化身は、美少女の股間からそそり勃ったフレッシュピンクの勃起をじっくりと品定めしつつ、妖艶な笑みを浮かべた。
「んっ……恐悦至極にございます。一つ、御前にお願いしたきことがございます」
ペニス実体化の余韻に震える声で、謝辞とともに願いを申し出るフタナリ美少女。
「申してみよ」
男の精気に飢えた神格は、呪詛喰らい師（カースイーター）の股間に視線を据えたまま応じる。
「私が御前の欲するままに精を供します故、そこに縛められている男たちを、全員、解き放っていただきとうございます」
「そうよのう……うぬの放つ精汁を味おうてから、こ奴らの処遇を決めようぞ」
狡猾（こうかつ）そうな笑みを浮かべた淫女神は、ヌロリ、と舌なめずりして告げた。

こちらから
ちょっちシン
試し読み
スタート!

「かしこまりました。ただちに精を搾り出しますれば……」
頬を染めながら言った神伽の巫女は、ジンジンと甘く疼く勃起に指を絡め、緩やかな上下動で手淫行為を開始した。
「ふぁ！　くぅ……んくうぅぅん……ッ！」
花びらの褥（しとね）の上で膝立ちになった半裸身がギクギクンッ！　と緊張し、紅潮した美貌が不慣れな男根快感に歪む。
（快感がストレートすぎて……精気の凝縮が上手くできない⁉　あまり激しくしたら、陽の気を十分に練り込めぬまま暴発させてしまう！）
淫ノ根顕現と同時に形成された射精中枢に、手淫刺激の快感がビンビンと響き、恥骨の裏側辺りで、甘美な放出欲求が急速に高まってゆく。
手淫の力加減をしなければ、慣れぬ快感に屈して、無駄に射精してしまいそうであった。元々がクリトリスを依（よ）り代（しろ）として肥大化させたフタナリペニスは、並の男性器とは比べものにならぬ感度を秘めていて、わずかな刺激も強烈な快感に変換してしまうのだ。
過去に行った神伽においても、淫ノ根を責められたことがあったが、咲妃の強靭な精神力をもってしてもその快感には抗いきれず、派手によがり悶えて大量射精を繰り返してしまった苦い思い出がある。
（半端な状態で射精して、女神様の興を削ぐわけにはいかない。注意深く、それでいて、

手を抜かぬように自慰行為をお見せしながら、精気を練り込む！）

精神集中のために目を閉じた呪詛喰らい師（カースイーター）は、込み上げてくる射精欲求に抗いながら、公開オナニーの動きを早めてゆく。

滑らかな指の輪で、熱く堅く張り詰めた肉茎を圧迫し、根元から先端に向かって往復運動を繰り返すと、摩擦刺激に反応した敏感な肉柱は、さらに硬く、太く充血し、握り締めた手指を火傷させそうな淫熱を放ってビクビクと脈動した。

食べ頃のプチトマトのように紅潮してプックリと膨らんだ亀頭先端のワレメから、水飴のように濃厚な先走りがトロリと溢れ出し、手淫行為を続ける少女の指を濡らす。

くちゅ、くちゅ、くちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅぷっ！

「はっ、んっ、フッ……ひぅ……あ、あ、はぁぁん……ッ！」

硬く反り返った肉茎を滑る指の間で、先走りがこね回される淫音を立てながら、倒錯的なペニスオナニーが続く。

ぬめりの強い男子の愛液が潤滑油となったことで、摩擦快感は大幅に高まり、喜悦に強ばったボンテージボディがガクガクと打ち震えた。

「ひぅ！　ンッ……あんッ！　くぁ……はぁう……ンッンッンッ、はぁぁんんッ」

どんなに抑えようとしても、勃起に絡んだ指の輪が上下に滑るたび、甘く痺れるような快感電流がペニスを駆け抜けて、切れ切れの呻きが漏れてしまう。

（まだだ！　まだ、射精してはいけない！　飢えたる女神を鎮めるためには、もっと、もっと濃い精気を練り込まないと！）

勃起の奥から押し寄せてくるむず痒い切迫感を堪えつつ、神伽の巫女は自慰に耽る。

「すげぇ、あんな美人が、チンポ生やしてオナニーしてる……」

「フタナリ少女って、エロゲだけかと思ったら、本当に居たんだな」

目を閉じ、一心不乱にペニスを扱き立てていた少女の鼓膜を、女神の声とは明らかに違う野太い声がくすぐった。

「えっ⁉　男たちの意識が……戻っている⁉」

呪詛喰らい師（カースイーター）は、いつの間にか蔦状触手から解放された若者たちが、欲望にぎらついた表情を浮かべて手淫行為を見つめているのに気づき、上気した顔を強ばらせる。

「何を驚いておる？　この者どもを解き放てと願い出たのは、うぬではないかえ？」

「さっ、左様ではございますが……この男たち、放置していては神伽の支障にはなるやもしれませぬ」

女神に煽られた咲妃は、今にも襲いかかってきそうな様子の男たちを強い視線で牽制しつつ、困惑の声を上げた。

「妾の興に沿わぬことはさせぬ。それに、見物は多きほうが昂ぶるであろ？」

妖艶な笑みを浮かべ、ネットリと絡みつくような口調で告げる淫女神。

（女神様は、お戯れ好きな性格のようだな……さて、どこまで乗るべきか？）

手を伸ばせば届きそうな至近距離で取り囲む若者たちを観察しつつ、呪詛喰らい師（カースイーター）は思考を巡らせる。

（男たちは解放されても逃げようともせず、淫女神の姿を見ても動揺しないところから判断すると、理性の一部を麻痺させられて、一種の催眠支配下にあるようだな）

「それ、手慰みを続けよ！」

動きの止まった咲妃を、女神が急かす。

「はっ……たっ、ただちに……」

容赦なく浴びせ掛けられる欲情の視線に羞恥心を煽られながらも、フタナリペニスの愛撫を再開する。

「んふ……く……んっ、ンッ、はぅ……はふ……ンンッ！」

切れ切れの呻きを漏らしながら、右手で肉茎を握って扱き上げつつ、左の掌で濡れ疼く亀頭を包み込んで優しく撫で回し、射精欲求をゆっくりと高めてゆく。

くちゅ、くちゅ、くちゅ、くちゅ、ちゅむっ、ぴちゅ、ぷちゅ……。

「んは……くうぅ……んっんっンッ……」

桜花の芳香と濃密な神気に満たされた空気を、先走りの体液がこね回される卑猥な粘音と、少女の切なげな呻きが混じった淫らなハーモニーが震わせる。

「爆乳ボディにSMコスで、チンポオナニーする美少女って、超ヤバくね？」
「うん……見とれる……チンポシコシコしてるあの顔、すっげぇエロい」
先ほどまで捕縛して嬲られていたとは思えぬ軽薄な口調で会話する若者たちの声が、呪詛喰らい師（カースイーター）の神経をざわつかせる。
（何故だ!?　こんな姿を見られるのは、屈辱でしかないはずなのに、身体が……淫ノ根が疼（うず）いて……あぁぁ、込み上げてくる！　まだ、まだ射精しちゃダメだッ！）
勃起の奥から熱くむず痒い射精の予兆が込み上げてきて、手淫の動きがぎこちなくなってしまう。
「なあ、アンタのチンポ、本物だよな？　つなぎ目も見えないし、ガマン汁トロトロ出てるから、リアルチンポなんだよな？」
咲妃の痴態を鑑賞しながらオナニーしていた若者の一人が、馴れ馴れしい口調で話しかけてきた。
髪を金髪に染め、耳たぶに幾つもピアスを装着している。
「はっ、話しかけるな！　気が散るから……だっ、黙っていろ！」
精神統一を妨げられた神伽の巫女は、眉を怒らせて一喝する。
「えー、ちょっとぐらいお話しようよぉ。お姉さん、名前、なんていうの？　シーメール？　それともマジモンのフタナリ？」

金髪男と友人らしい茶髪の若者も軽薄な質問を投げかけてくる。
「黙れと言っただろう！　……御前にお願いいたします、せめて、この者どもを黙らせていただけませぬか？」
卑猥なインタビューに堪りかねた咲妃は、淫女神に直訴する。
「何を申す？　これも興ではないかえ。男子（おのこ）どもの問いに偽ることなく返答し、手慰みを続けよ」
予想していたこととはいえ、女神の返答は少女の訴えを全面的に退けるものだった。
「く……御意のままにいたします。なっ、名前は、常磐城咲妃。性別は女性だが、このペニスは、本物だ……ンッ、あんッ！」
恥辱を堪えて質問に答える間も、ペニスを扱き上げる手の動きは止められず、敏感な勃起は鈍痛を感じてしまうほどに充血して、快感がどんどん蓄積されてゆく。
「ねえ、チンポシコシコするの、気持ちいい？」
淫女神のお墨つきを得て調子に乗った男たちは、さらに下品な質問で少女の羞恥を煽る。
「……⁉」
デリカシーのない茶髪の若者をにらみつけた呪詛喰らい師（カースイーター）は、恥辱に頬を染めながらも、無言で頷いて見せた。
「黙ってんじゃなくって、声に出して聞きたいなぁ。ねえ、チンポ気持ちいい？」

「くぅ……。きっ、気持ち、いい……ッ！　ンッ、くうぅんッ！」
男たちから顔を背けつつ答えた少女の背筋を、妖しい悦波がゾクリ！　と駆け抜け、フタナリペニスが硬度を増してしゃくり上げた。
「たまんねえ声と表情！　さっきのセリフ、アンコール！　アンコール！」
下品なアンコールの連呼が起きる。
「乞われるままに言うてやれ。恥じらい乱れて、悦楽の宴を盛り上げよ！」
恥語を強いてくる女神の声も華やいだ響きを帯びていた。
（淫女神様は、こういう趣向がお気に召しているというわけか？　ならば、毒を食らわば皿まで！）
「きっ、気持ちいい……こうやって弄ってると、凄く気持ちよくって、もっ、もう……射精してしまいそうだッ！　くんっ、んふうぅぅう……」
腹を決めた神伽の巫女は、男たちに見せつけるように腰を突き出し、先走りに濡れ光るペニスを扱き立てて自慰に耽る。
「チンポ弄ってるのに、めっちゃ色っぽい声と表情！　咲妃ちゃんのチンポオナニー、オカズにさせていただきま～す」
耳障りな野次を飛ばしながら、手を伸ばせば触れられそうな距離にまでにじり寄ってきた若者たちは、手淫の宴に加わってくる。

自慰に耽るフタナリ少女の倒錯的な痴態をオカズにして、色もサイズも様々な八本のペニスが扱き立てられ、咲妃とともに射精というゴールを目指す。

「くンッ！　オカズでもメインディッシュでも、かっ、勝手にしろ！　ん……あふうぅぅ……くは……んくっ……は……ンッ！」

吐き捨てるように言って目を閉じた退魔少女は、喉奥から漏れそうになる快感の呻きを必死に押し殺し、飢えた女神に陽の精気を供するための体液を練り上げてゆく。

込み上げてくる射精欲求に耐えつつ、勃起の奥に溜め込まれた絶頂粘液に神気を練り込むフタナリ少女の身体は、膝立ちの姿勢を維持したまま、背筋を反り返らせて切なげに揺れ悶えた。

（どうせ、神伽を終えたら、この下品な男たちの記憶は呪印で消す！　今は余計なことを考えず、女神様に供物の精液を捧げることだけに集中するんだ！）

亀頭冠を逆撫でしながら這い上ってきた指の輪が、鈴口に盛り上がっていた先走りの滴を拭い取り、熱く猛った勃起全体に塗りつけてヌルヌルとストロークする。

くちゅ……ぬちゅ……くちゅ……ちゅぷ……くちゅ……くちゅっ……。

切れ切れの淫音を立てて摩擦された淫ノ根は、さらに硬度を増し、艶めかしい薄紅色に上気して、下腹にめり込まんばかりにそそり勃った。

「咲妃ちゃん、チンポ扱くの下手くそだなぁ。ほら、見本見せてやるよ、こうやって……

こう……もっと早く動かすんだよ！」

咲妃のスローな手淫ストロークが気に入らなかったのか、若者の一人が自分の浅黒い巨根を見せつけながら、オナニーのやり方を指図してくる。

「どっ、どうやろうと私の勝手だろ！　頼むから黙っていろ！」

至近距離で扱き立てられる巨根から目を逸らした神伽の巫女は、苛立った声で威嚇する。

「巫女よ、抗うてはならぬ。その男子のするがままに真似てみよ」

咲妃の痴態を見ることに歪んだ悦びを感じている女神が、横槍を入れてきた。

「しっ、しかし、それでは、御前に捧げる精に、神気を存分に練り込めぬまま放ってしまいます」

女神の不興を買うこともいとわず、咲妃は反論する。

不慣れな手淫の快感で神気の濃縮が捗らないうえに、下品な男たちに邪魔されて、普段は冷静沈着な退魔少女も、焦りの感情を覚えていた。

「構わぬ。いかに濃い精を練り上げようとも、一度や二度の放精では、妾の渇きは癒せぬ。これもまた興の一つじゃ。男子どもと同じ所作にて精を放って見せよ」

積年の渇きを溜め込んだ桜の化身は、穏やかな中に絶対に抗えぬ威圧感を秘めた声で、ハードな手淫行為を命じる。

「おっ、仰せのままに……ンッ、ひッ！　はぅ……く……ンンンッ！」

淫女神が命じると、粘液塗布の作業を終えて一旦離れていた男たちが、包囲の輪を再び狭めてきた。

欲情に目をぎらつかせた若者たちの股間では、何度射精しても萎えぬペニスが、下腹にめり込まんばかりにそそり勃っている。

「次なる興は、妾の好む恥戯じゃ……摩羅同士の繰り合い、男子の槍比べよ」

「槍比べ⁉」

言葉に暗示された不穏で背徳的な意味を察した咲妃は、男どもの勃起と、自分の股間で痛々しいほどに屹立したピンクの肉柱を交互に見ながら、不安げな表情を浮かべる。

「うぬならば見えるであろう、心眼を凝らし、男子どもの摩羅を見てみよ」

「心眼で、男どのモノを？　う……ッ！」

霊気やオーラを感知する呪詛喰らい師（カースイーター）の目は、男たちの勃起が炎のように揺れるオーラに包まれているのを捉えて小さな呻き声を上げた。

（精力を司る『性球のオーラ』が異様に活性化して、暴走状態になっている⁉　このまま放置していたら、全身の気を精液に変換して、衰弱死してしまうぞ）

「妾が点した摩羅灯明（まらとうみょう）、見えたかえ？　この焔を消すには、いかに処すればよいか、判るであろ？」

「はい……」

えっちシーン試し読み ここからスタート

神伽の巫女は、複雑な想いを抱きつつ頷く。
（彼らと性交し、女性の放つ陰の気で中和し鎮めるのが、最も手っ取り早い方法だが、それは私もやりたくない。第一、女性器は封じられているから、不可能だな）
小さな安堵のため息を漏らす咲妃であったが、次に浮かんだ懸念に表情が曇る。
（結局、もう一つのやり方しか許されていないのか？　だが、さすがにそれは、いくらなんでも恥ずかしすぎるぞ！）
もう一つ残された対処方法にも強い抵抗と羞恥を感じた退魔少女は、他のやり方を模索するが、いいアイデアは浮かんでこなかった。
「巫女よ、悩んでも詮無きこと。早う乞うのじゃ」
恥戯への期待で人外の美貌を華やかせながら、淫女神は恥悦の行為を急かしてくる。
「……みんなにお願いがある。わっ、私のモノに……お前たちのペニスを、こっ、擦りゆけてくれ！」
突然の破廉恥なおねだりに、男たちがざわめく。
「えぇっ！　チンポ同士擦り合うの⁉　咲妃ちゃんって、お顔は超美系なのに、ド変態チンポ女だったんだ。……でも、そのギャップが萌えるッ！」
「オレ、こういう行為で興奮するわけないとおもってたけど、咲妃ちゃんのチンポ見てたらめっちゃ昂ぶってきた！」

ペニスに燃える淫情の焔に理性を侵食された男たちは、呪詛喰らい師（カースイーター）の求めに応じ、鼻息も荒く腰を突き出してきた。

そそり勃った牡器官が左右から迫り、フタナリペニスを包囲してグリグリッ！　と押しつけられる。

「く！　あぁ……はぁぁんッ！」

悩ましげな声を上げた呪詛喰らい師（カースイーター）の身体が、硬く張り詰めた陰茎海綿体同士がギュリギュリと睦み合う背徳的な快感に痙攣する。

「うぉっ！　エロい声！」

「女なのに、チンポが気持ちいいのか？　じゃ、じゃあ、もっと擦ってやるよ」

フタナリ美少女の敏感な反応に欲情した男たちは、強烈すぎる刺激から逃れようとする咲妃の太腿を抱え込んで、さらに強く腰を押しつけてきた。

ぐりゅっ、ぎちゅっ、ぎちゅっ、ぐりっ、ぐりっ、ぐりゅっ、ぎゅむっ、ずちゅっ、ぎち、ぎち、ぬちゅるっ……。

赤黒く充血した男どもの剛直が、艶やかな薄紅色をした美少女の勃起を取り囲み、摩擦熱で発火しそうな程の激しさで擦り嬲る。

「ひぁ！　そっ、そんなに寄ってたかってきつく押しつけるなぁ！　やっ、あっあっアッあんッ！」

想像を絶する摩擦快感に、切れ切れの甘い悲鳴を上げて仰け反る呪詛喰らい師（カースイーター）。
圧迫された陰茎海綿体から発生した悦波が射精中枢を直撃し、淫女神によって植えつけられた前立腺ががビリビリと痺れ疼く。
「こっ、これ、思ったよりも気持ちいいッ！　チンポ同士が擦れるコリコリした感触が新鮮で……んおぉぉ！」
倒錯的なペニス同士の睦み合いに興奮を強めた若者は、獣のようなうなり声を漏らしながら尻を振る。
（オーラの焔が私のモノに燃え移ってくる⁉　あぁぁ、焼けてしまいそうだッ！）
咲妃のペニスを疼かせているのは、単なる摩擦熱だけではなかった。
男たちのペニスに宿っていた淫情の焔が、射精絶頂の余韻が残る肉茎を灼熱させて燃え移り、ただでさえ敏感な器官をさらに硬く、狂おしく反り返らせてゆく。
びきっ、ぎちゅ、ぎちゅ、ぎしっ！
陰茎海綿体を軋ませながら伸び上がった美少女の勃起は、激しく擦りつけられる男たちの器官に対抗するかのように体積を増し、亀頭冠の張り出しを際立たせた。
「咲妃ちゃんのチンポ、さっきよりも大きくなったんじゃない？」
「擦られて感じてるんだな？　ボクも……きもちいいよっ！」
妖しい快感の虜になった二人の若者は、勢いあまって互いのペニスがぶつかり合うのも

構わずに、兜合わせの恥戯に熱を込める。
「どうじゃ、心地良かろう？　この恥戯を命じられた男子は、誰もが初めは物怖じして拒みおるが、すぐに愉悦の虜となって自ら腰を揺すり立て、擦り合いに興じおる」
背徳の快感にのめり込んでゆく人間たちの痴態を鑑賞しながら、男の精気を好む桜の化身は楽しげに微笑む。
「あっ、オレ、イキそう……」
「咲妃ちゃんのチンポ気持ちよすぎて……出るッ！」
背徳的な快感に屈したのは、男たちのほうであった。
フタナリペニスにきつく押し当てられた二本の勃起が、制御不能の脈動を起こす。
びゅくんっ！　びゅくびゅくびゅるるるるうぅぅぅ～ッ!!
ほぼ同時に放たれたスペルマが、肉感的な太腿に弾け、フタナリペニスにも容赦なく粘り着き、汚してゆく。
「んぁ！　熱いッ！　あはぁぁぁ～ンッ!!」
絶頂粘液の攻撃を受けて悩ましげな声を漏らしながらも、咲妃は込み上げてくる射精衝動を必死に抑え込む。
「ハァハァハァ、すげぇ興奮した。なあ、このまま二発目イッちゃっていい？」
「お前たちはもっ、もういいっ！　つっ、次の男と交代しろッ！　あひんっ！」

若者たちの股間を包んでいた欲情の焔が大幅に縮小したのを確認した神伽の巫女は、精液まみれの勃起を未練がましく擦りつけてくる男たちに交代を促す。
「ちっ、仕方ねえなぁ……あとでまたチンポ相撲させてくれよ？」
引き下がった二人と交代に咲妃の前に立ったのは、二人の少年だった。
他の男たちよりも年下で、まだ子供っぽさの残る顔はよく日焼けしている。
（通学中に行方不明になった学生だな……思春期のせいなのか、オーラの暴走状態が、他の男たちよりも緩やかだが、勃起状態が痛々しい。早く鎮めてやらねば……）
二人の股間では、まだ生育途上の包茎ペニスが包皮を突っ張らせていきり勃っていた。
勃起同士を擦り合わせる行為に対する抵抗がまだ残っているのか、恥ずかしげに顔を伏せた少年たちは互いに目配せし合ってばかりで、なかなか仕掛けてこない。
「恥ずかしがることはない……来て……」
呪詛喰らい師（カースイーター）は、慈愛と色香に満ちた笑みを浮かべ、年下の少年たちを背徳の行為に誘う。
「う……うん……」
M字開脚された太腿の狭間に割り込んできた未成熟なペニスが、精液まみれのフタナリ勃起にピタリと密着した。
「ひぅ！　ンンッ！　ゆっくり、動いて……」
肉茎をピリピリと疼かせて燃え移ってくる淫火に美貌を歪めながら、神伽の巫女は優し

い声で背徳のストロークを促す。
「お姉さんのチンチン、ボクよりも大きい……。ンッ、ンッ、ンッ、くんっ……くふぅんッ……」
にちゅ、にちゅ、にちゅ、ちゅく、ぷちゅるっ……。
二本の包茎ペニスが、彼らのものよりも雄々しく反り返ったフタナリ勃起に押しつけられ、ぎこちない動きで摩擦行為を開始する。
「そっ、そうだ……それで、いっ、いいっ！　あんッ！」
「お姉さんッ！」
「好きですッ！　あむっ、んふ……ちゅぱちゅぱちゅぱずちゅるるるっ！」
年上美少女の色っぽい表情と声に感極まった少年たちは、目の前で揺れ弾む爆乳に顔を埋め、艶めかしいピンク色に濡れ光る乳首を咥えて吸いしゃぶる。
「こっ！　こら、吸うんじゃない！　ん……んっ……」
苦笑を浮かべ、少年たちをたしなめる咲妃の顔が、切なげに歪む。
女悦封じされた乳首を激しく吸われ舐め転がされる快感は、股間にそそり勃つ牡器官に集約され、陽の気に変換されて蓄積されてゆく。
（乳首の感じ方が、いつもと違う……これはこれで新鮮な快感だが、溺れていたら暴発してしまうな）

頭の片隅でそんなことを考えながら、咲妃は巧みに尻をくねらせ、陰茎摩擦の快感をコントロールする。

自分は極力感じないように、押し当ててくる包茎ペニスをいなしつつ、密着状態だけは維持して、生育途上の男根を燃え疼かせている淫情の焔を吸い取ってゆく。

くちゅっくちゅっ、くちゅぐちゅじゅぷぐりゅりゅっ！

塗り込められた精液と、絶え間なく分泌する先走りのぬめりを塗りつけながら、興奮で強張りを増したペニス同士が互いの硬度を競い合うように絡み合う。

「淫らの情に滾(たぎ)りし竿比べ、よき眺めよのう」

はち切れそうにそそり勃った肉槍が、濃厚な性臭を放ちながら互いを摩擦し、先走りと精液の糸を引いてせめぎ合う光景を、ウットリと見つめる淫女神。

ぬちゅぬちゅぬちゅ……きゅむんっ！

激しく擦りつけられていた少年の強張(こわば)り先端を包んでいた薄皮がニュルリと剥け、バラ色に充血した亀頭が露出する。

「ふぁ！　んふぁぁんっ！」

まるで女の子のような声を上げた包茎少年たちは、まだ男になりきっていない裸身を必死に伸び上がらせ、自分のモノよりも立派な咲妃の美少女ペニス先端を目指す。

くりゅんっ！　にちゅ、ぐりゅっ、ぎゅりぎゅりんっ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

『呪詛喰らい師』関連作品のご紹介

あとみっく文庫

呪詛喰らい師
カースイーター
シリーズ

蒼井村正

挿絵／或十せねか

全国の書店・電子書籍サイトにて発売中!

速報!

『呪詛喰らい師』コミカライズ決定!

原作：Rusty Soul

作画：或十せねか

原案：蒼井村正

『正義のヒロイン姦獄ファイル』にて

連載スタート!!

二次元ぷち文庫

電子書籍でしか読めないドキドキ★ラノベ!

呪詛喰らい師外伝
シリーズ

夏祭り封神譚

餓神乳辱 前編・後編

淫女神の森 前編・後編

蒼井村正

表紙イラスト：或十せねか

好評配信中!